

### 3 筒井八百珠と『臨床医典』

小田 皓 二

一九九〇年に岡山で開かれた第九一回の本会総会で、長門谷洋治氏により「筒井八百珠（一八六三〜一九二一）―その生涯と業績」が発表されている。今回は、筒井の曾孫である岡大分子細胞医学研究施設の筒井研氏の協力を得て、未発表の資料によって筒井の業績、とくに主たる著書である『臨床医典』を中心に発表したい。

筒井は一八六三年（文久三）に和歌山県新宮で生まれ、家は代々新宮藩の剣道師範をつとめていた。一八七七年（明治一〇）に三重県医学学校に入学し、二年後に県命によって東大医学部に進み、一八八九年（明治二二）に卒業した。スクリバについて外科学を学び、翌年から千葉の第一高等中学校医学部の外科教授に就任。二三年間勤務し、はじめは外科学・皮膚病学・花柳病学を担当した。

一九一三年（大正二）、有名な岡山医専のストライキのため菅校長が責任をとって辞任し、急拠、筒井が後任の校長に任命された。岡山へ赴任後は、文部省の抜擢と内外の期待に応えて抜群の指導力を発揮し、混乱した学園の正常化に成功し、岡山医専の大学昇格に尽力した。こよなく酒を愛し、豪放磊落、天真爛漫、しかも人情ゆたかな校長であったという。在任七年半にして昇格を目前にした一九二一年（大正一〇）一月、食道癌のために五七歳で死去した。

筒井は学生時代よりドイツ医書の翻訳を行い、東大を卒業した翌年、一八九〇年（明治二三）に『Vienna clinic』を翻訳した臨床医典を出版しており、版權登録之証や、増補改訂の出版届、契約書などの書類が残っている。学会でも積極的に活躍し、臨床医典の他にも、専門とした皮膚病学や花柳病学に関する多くの論文や著書を発表している。

『臨床医典』は、一般医家が座右の書として利用できるようポケット版で刊行された。初版は附録を含めて五二七頁、項目数三一八で臨床に必要な全科の疾患を網羅

している。

筒井家蔵の「筒井本」は、初版と二、三、六、九、一、一四、一五、一七、二〇、二三、三六版である。長門谷氏によると、一九二四年（大正一三）に三二版が出ているが、筒井本では一九二九年（昭和四）に三六版が発行されており、没後八年が経過した後もなお出版がつけられていたことが判明した。

ところが岡大医学部図書館の「岡大本」には、初版、一三、一八、二〇、二四、二五、三〇版以外に四五版、さらに一九四四年に発行された四六版があった。この四六版を最後に絶版になっており、四六版は一〇七四頁、項目数は初版の二倍以上で、内容は比較にならないほど多くなっている。

初版が出てから、亡くなるまでの三一年間にすでに二九版が出版されている。さらに死後も二三年間にわたり、筒井の遺志をついで長男の徳光（東大医卒、岡大眼科助教から熊大教授、のち岡山で開業）によって出版が続けられた。

臨床医典は毎年のように増補改訂を行っており、その

後のポケットブック医書の先駆となっている。また半世紀におよぶ時代の変化と医学の進歩を物語っている。初版が出た明治二三年から、昭和一九年までの五四年間にわたって四六回も版を重ねていることは、まさに驚異的といってもよい。長年の需要にさええられた超ロングセラーであり、出版元である南江堂の社伝によると、医書としてベストセラーであったという。

筒井は学生時代から早くも医書の翻訳を始め、生涯にわたって情熱を注いだ名著『臨床医典』が信じられないほど長い命脈を保っている。医専校長として、学者として、著者として、千葉と岡山だけでなく日本の医界に大きく貢献した筒井八百珠を、長門谷氏に次いで再び紹介する。

（井原市・小田病院）